



企業プロフィール

- 設立：1912年
- 事業内容：電子・セラミック製品の開発・製造
- 従業員数：3,549名(2015年3月現在)
- 年次有給休暇の取得率：30%
- 年間休日数：120日
- URL：http://www.ibiden.co.jp/

ボランティア休暇



社会と関わるための
休暇制度

特別休暇の奨励で社会貢献を実現 ドナー第1号誕生

ポイント

- ① 社会貢献委員会がボランティア休暇の取得を後押し
- ② 年間7日間の特別有給休暇で自分の可能性に挑戦

創業103年を迎えた岐阜県大垣市のイビデン株式会社は、1912年に水力発電の会社として設立された。その後自家発電を活用した電気化学工業へと発展を遂げ、さらに建材、電子・セラミックと業容を拡大してきた。

社会の発展に貢献することを経営理念に掲げる同社は、ボランティア休暇という特別有給休暇(年間7日間)の制度を従業員が大いに利用して、一人ひとりが地域に役立つ人材となることを、会社を挙げて奨励している。

同社がボランティア休暇を導入したきっかけは今から20年前の阪神・淡路大震災。導入と同時に社会貢献委員会が発足し、以来休暇取得の促進役を担ってきた。同社の取組みについて、人事、総務、広報をそれぞれ担当する経営企画本部のお三方(人事グループマネージャーの横山雅一さん、総務グループの佐藤巧治さん、経営企画グループの成瀬優文さん)と、実際にボランティア休暇を取得して骨髄移植のドナー第1号となった片野恵介さんにお話を伺った。

ユニークな社会貢献委員会の活動

20年前のボランティア休暇制度の導入と同時に発足したのが社会貢献委員会(以下、委員会)です。委員会の役割のひとつは、ボランティア休暇を取得したい従業員の申請内容を精査して、承認することです。事

務局の役割を総務グループ内社会貢献担当(3名で対応)が行い、従業員との橋渡し役として各事業場やグループ会社にいる委員が現場の声を丁寧によく上げる役割を担っています。

当社に限らないと思いますが、従業員のボランティア活動に対する関心は年々高くなっています。特に

2011年の東日本大震災の後、多くの従業員がボランティアとして被災地に駆けつけました。その一方で、気持ちは持っていても、周囲に迷惑をかけるのではないかと懸念から、なかなか休暇の取得に踏み切れない人たちもいました。委員会はその率直な声に耳を傾けながら、ボランティア活動から会社の活力が生まれることをしっかり伝え、一歩踏み出すことを強く後押ししました。同じ職場の事情を知る委員から励まされることが大きな力となってボランティア休暇の取得につながっていきました。

社内報でも委員会の活動を紹介するとともに、1年に7日間取れる特別有給休暇のアナウンスを続けています。まだ知らない人も多いですが、社内報で実際に休暇を取った人の話を読み、自分もチャレンジしたいという気持ちになった人が少しずつ増えています。

ボランティア休暇が育む次への活力

育児休暇や介護休暇などの休暇と違い、ボランティア休暇は範囲がわかりにくいので、委員会では本人が上司に相談できる環境づくりを行っています。申請窓口である事務局に相談するとともに同じ職場で働く委員にも相談することで、自分の活動の意義がより明確になり、不在時の仕事のローテーションも相談できるため、大きな安心が得られます。

この地域はスポーツ少年団の活動が活発な地域であ



左から横山マネージャー、佐藤さん、片野さん、成瀬さん

り、活動に参加している従業員も数多くいますが、大会などの指導者や役員での参加は年次有給休暇を使う場合がほとんどでした。地域の消防団活動などに参加するときも多くは年次有給休暇を消化してきましたが、最近はボランティア休暇制度の浸透によってこのような地域活動に活用する従業員が増えつつあります。また、ボランティア休暇によって、新たな挑戦も可能になり、そのことが従業員の活力になっています。さらに、休暇の意義を理解して協力してくれた同僚たちと絆が深まることでお互いに助け合う風土が生まれ、職場の雰囲気も明るくなっています。

社内では、ボランティア休暇を活かして骨髄移植ドナーとなった片野さんの話(下記参照)が伝わり、片野さんに続こうとする従業員も現れました。社会貢献のあり方が多様化する時代にあって委員会の役割は一層重要となってきましたが、委員会をはじめ担当スタッフは、休暇制度の潤滑油となるよう努力しています。

当社はおかげさまで創業100年を超えましたが、これからもきめ細やかな休暇制度の充実を図り、地域に貢献できる企業を目指します。

休暇制度 利用者の声

私は、骨髄バンクのドナーとして3日間のボランティア休暇を取得しました。もともと献血をライフワークにしており、献血の際に骨髄バンクのチラシを見たことで、迷うことなくドナー登録しました。実際に骨髄移植の依頼が来た時も、幼い頃、身近に白血病に苦しむ人がいたこともあって、抵抗なくドナーに名乗り出ました。ただ、一番心配だったのは、短期間とはいえ、相手の体調に合わせて会社を連続して休まなければならないことでした。思い切って上司に相談したら強く背中を押してくれました。ボランティア休暇のことは

社内報などで知っていましたが、もし、上司や同僚の協力が得られなければドナーを諦めていたと思いますし、その後、深く後悔したはずですが、私がドナーを引き受けたことで、患者さんから「希望の光です」と手紙をいただきました。決して会うことのない人ですが、誰かの役に立てたという喜びを私は終生忘れません。誰かとつながったことで一層業務に張り合いができました。ドナー第1号と言われることを誇りに思い、またチャンスがあれば新たなことにチャレンジするつもりです。

(技術開発本部 片野恵介さん)